

12才, ♀65名, 44±11才)と職員(♂67名, 39±14才, ♀102名, 37±13才)を対比し肥満の現状を調査した。肥満度算出法は Broca 法や桂変法が一般的であるが低身長者を肥満と過大評価する。そのため今回は, 日本の大手保険会社が発表した死亡率より得た理想体重をもとに肥満度を算出した。患者群における肥満度 ($\bar{x} \pm 1SD$ ♂ 4.6±14, ♀9.9±19)は職員群(♂ -1.3±12, ♀1.1±13)に比べ有意に肥満傾向を示し, 特に女性で顕著であった。さらに肥満度と血中脂質の関係は, HDLC で男性において有意に肥満度と逆相関を示した。また肥満度20以上の肥満群と非肥満群に層別すると TC が 250 mg/dl 以上の高脂血症例が肥満群で21%非肥満群で5%存在した。(VLDL+LDL)/HDL では肥満群で有意に高値を示した。

次に肥満の要因について分析した。患者の日程から求めた消費熱量は約 1,900kcal と給食等による摂取熱量の 2,000kcal +間食を²下回っており職員群の8割であった。患者の運動量として1日の平均歩数は4800±2400歩と職員群の5割であった。8項目の体力テストの結果は患者群で動的体力の低下が顕著であった。

当院の肥満対策として肥満教室を組織し栄養・生活指導やレク活動・行動療法を実施するとともに, グアーガムを用い希望した患者に10週投与して体重の変化を観察した。この食品はガラクトマンナンを主成分とするもので1次的な体重減少が目的と受けとられるが, 真の狙いは肥満解消の動機づけとして利用するものである。10週後の 2kg 以上の体重減少者は18名中4名で, うち1名が標準体重に達することができた。しかし, 集団としてとらえた場合, 体重の減少・血中脂質に有意な改善は認められなかった。

以上, 減量の動機づけとしてグアーガムを用いたがやせ薬のごとく錯覚又は過信した負の効果もあり, 患者の意欲を最大に盛上げられず, 減量が期待通り進まなかったと考えられる。今後は得られた基礎成績をもとに, 教室のカリキュラムの再構成及び集団での指導に加え, 個別性・自主性を十分考えたアプローチとその継続が必要であると考えられる。

今回の発表は当院における肥満対策の結論ではなく, はじまりであることを付け加え問題提起としてここに報告する。

8) 人 格 障 害

—1千万円の借金し, 破綻した
1症例について—

加藤 佳彦・佐藤 哲哉 (新潟大学精神科)
飯田 真

Schneider の類型の意志欠如者, ICD-9 の無力性人格障害, DSM-III の非定型人格障害と診断された症例を呈示し, その精神病理と, 患者にとっての借金の多義的意味を考察した。

症例は, 35歳, 男性。3人兄弟の長男で, 成績はよくなく, 学歴で苦学した父親に, 弟たちと比較されながら育った。会社員になってから, 月給を特に何に使ったというわけではないが20日間くらいで使い切り, 約百万円の借金をしたり, 病気になり収入がなく, 金銭的に苦しい状況であったが, 儉約する様子もなくブランド品などを購入し, 約1千万円の借金をしたというエピソードもあった。また, 家を飛び出し, 20歳年上の女性と結婚したこともあった。

なぜ, 20歳年上の女性と結婚したかということ, 患者と母親との関係から考察した。家族内で, 父親に絶対的な権限があったが, 母親は, 服従している患者を充分保護できず, 患者は自分を攻撃してくるものから守り保護してくれそうな, 強い女性に魅力を感じ, 男まさりの年上の女性に好意を持ったと考えられた。

次に, 患者の借金の意味を父親との関係から考察したい。その借金には, 無計画性, 現実的目的性からの遊離性, 発覚後の安堵感などの特異な点があった。一般に精神分析では「金を使うこと」は父との関係の象徴といわれる。したがって, 患者の歪んだ父との関係が, 患者の正常とは少しかけ離れた借金の特徴に写し出されていると考えて, まずまちがいないだろう。患者は父親に対して, 30歳前後の男性にとって特有の父親からの独立と, 患者の父親の高い理想像に到達できないことから生じる父に対するマゾヒズム的依存という両価的な気持ちを持っていた。つまり, 彼の借金の特徴の無目的性とブランド品の購入などにみられる利那的高揚感を求めるのは, 独立と関係し, 借金が発覚してからのある種の安堵感, 依存と深く関連していた。彼は借金により独立と依存という両価的なテーマを解決しようとしていたと考えられた。